

氏 名	小澤 啓 (オザワ ヒラク)
学位の種類	博士 (造形)
学位記番号	博第 9 号
学位授与日	平成 24 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論文題目	熊野信仰をめぐる神秘性・霊性のイメージとその要素・条件
審査委員	主査 武蔵野美術大学教授 遠藤 彰子 副査 武蔵野美術大学教授 高橋 陽一 副査 武蔵野美術大学教授 田中 正之 副査 國學院大學准教授 藤田 大誠

内容の要旨および審査結果の要旨

審査委員会は、小澤啓（武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程造形芸術専攻作品制作研究領域 3 年次在学）から提出された学位請求論文（博士論文）『熊野信仰をめぐる神秘性・霊性のイメージとその要素・条件』について審査を行い、武蔵野美術大学大学院博士後期課程を修了して博士（造形）の号を授与するにふさわしいと結論した。

1. 審査の経緯

(1) 予備論文審査

予備論文審査を、本論文の審査に先だって実施した。予備論文の審査委員会は、主査遠藤彰子（指導教員・油絵学科教授）、副査（外部）として藤田大誠（國學院大學准教授）、副査（内部）として田中正之（造形文化・美学美術史教授）、高橋陽一（副指導教員・教職課程教授）の合計 4 名で構成した。2011（平成 23）年 7 月 28 日に審査委員会を開催し、1 時間以上にわたって小澤啓（博士後期課程 3 年）の口頭試問を行ったうえで審議をおこない、次のような今後の課題を確認して、全員の結論として予備論文としての合格の判定を行った。

予備論文審査の概評は、次のとおりである。

① 博士予備論文は、作品制作研究領域において、「神秘性・霊性を感じられる場の風景」という絵画制作上のテーマについてのモチーフ研究として位置付けて取り組み、序章及び補論 2〔本論文第 4 章に相当〕において明示している。口頭試問においては、作品制作にかかわってものをみる「まなざし」や、なぜ湿度や水なのかという点が具体的に作品と関連して質問された。また使用された「原風景」や「普遍性」、「自然崇拜」という用語にも

質問があり、その明確化の必要が指摘された。今後も制作を続けて博士論文に向けて制作ノートを充実することなどが課題とされた。

② 学術研究としての本論文の意義は、文学、歴史学、神道学、さらにはツーリズムやメディア研究と各分野の成果を可能な限り摂取したうえで、独自のテーマに挑戦したことである。審査では、行政資料や雑誌資料など様々な原史料にアプローチした姿勢を評価するとともに、雑誌『旅』研究などについて他領域の研究に重要なデータを提示する独自の価値があることが確認された。さらに、研究テーマと関係して、修験道研究や明治維新期の変化に関する研究、熊野曼荼羅や「那智瀧関」（根津美術館所蔵）などの重要作品のフォローの必要、補論1の広島と鳥取のフィールドワークの続行の必要などが指摘された。

③ 博士予備論文に先行して、予備論文第1章に相当する『「教育学研究」ゼミナール報告書』第4号（2011年1月）、同第2章に相当する本学『博士後期課程研究紀要』第4号（2011年3月）、同第3章に相当する『「教育学研究」ゼミナール報告書』第3号（2010年1月）であり、『研究紀要』論文が査読済として扱われるものであることが確認された。引き続き研究成果の発表（本〔2011〕年9月24日の日本教育史学会例会・於謙堂文庫）などの努力が期待された。

（2）公聴会及び本論文審査

本論文の審査にあたっては、審査委員会は予備論文審査委員会と同一の4名の委員で組織した。2012（平成24）年2月20日午後1時から90分間、主査遠藤彰子の司会により公聴会を行い、論文の概要の発表と関連する作品の説明、参加者からの質疑の形態で、2号館1階FALにおいて実施した。

なお、公聴会会場において展示された小澤啓制作の作品のリストは、次のとおりで、本論文第4章第4節に作品の画像を掲載したものは＊印を付けた。なお、本論文審査にあたっては作品のポートフォリオが資料として提出された。

- ① 「夜の水たまり」（油彩／パネル、29.6 × 42.0cm、2012年） ＊
- ② 「熊野の印象」（油彩／キャンバス、186.0 × 240.0cm、2011年） ＊
- ③ 「林の中の光」（油彩／キャンバス、160.0 × 400.0cm、2011年） ＊
- ④ 「朝の水辺」（油彩／パネル、44.6 × 66.7cm、2012年）
- ⑤ 「夜の水路」（油彩／パネル、72.7 × 60.6cm、2012年）
- ⑥ 「竪穴」（油彩／キャンバス、162.0 × 125.0cm、2012年）
- ⑦ 「地」（油彩／キャンバス、162.0 × 194.0cm、2012年） ＊

同日午後2時30分より、審査委員会が本人に1時間にわたり口頭試問を行い、博士論文審査を実施した。審査の結果、造形と学術研究に寄与する独自の優れた内容を確認し、博士（造形）にふさわしいものと結論した。

2. 学位請求論文の概要

本論文は、2011(平成23)年7月に審査した予備論文を加筆訂正して提出されたもので、予備論文以後の調査研究により内容を追加して章構成を変更している。本論文の構成は次のとおりである。

なお、論文は、資料を含めて本文179頁であり、400字詰め原稿用紙で800枚程度に相当する。このうち発表済のものは、第1章が『「教育学研究」ゼミナール報告書』第4号(2011年1月)、第2章が本学『博士後期課程研究紀要』第4号(2011年3月)、第2章補論が『「教育学研究」ゼミナール報告書』第3号(2010年1月)であり、このうち『研究紀要』が査読済論文として扱われるものである。

『熊野信仰をめぐる神秘性・霊性のイメージとその要素・条件』

序章

第1節 「神秘性・霊性を感じられる場の風景」をめぐる

第2節 熊野三山と研究動向

第1章 「俊寛」作品群にみる熊野の神秘性・霊性

—平家物語から近代文学に至る変遷に注目して—

はじめに

第1節 『平家物語』と『源平盛衰記』にみる鬼界が島

第2節 『平家物語』、『源平盛衰記』をモチーフにした作品群の分析

おわりに

第2章 1920-40年代の『旅』にみる熊野の神秘性・霊性記事

はじめに

第1節 旅行ガイドブックに関する研究と方法

第2節 『旅』と掲載記事の調査方法

第3節 熊野の神秘性・霊性記事

第4節 記事にみる神秘性・霊性記事の特徴と背景

おわりに

第2章補論 旅行ガイドブックにみる神秘性・霊性に関する試論

はじめに

第1節 熊野の旅行ガイドブックの分析

おわりに

第3章 広島県比婆山伝説地・鳥取県熊野神社遺跡・京都三熊野における、熊野の神秘性・

霊性イメージを形成する要素・条件

はじめに

第1節 比婆山山麓の熊野神社にみる紀州熊野信仰

第2節 鳥取県熊野神社遺跡にみる紀州熊野信仰

第3節 京都三熊野にみる熊野の自然要素

おわりに

第4章 神秘性・霊性の表現

—作品制作を通して—

はじめに

第1節 比婆山伝説地・鳥取熊野神社遺跡・京都三熊野における神秘性・霊性

第2節 熊野曼荼羅にみる神秘性・霊性の表現

第3節 「那智瀧図」にみる神秘性・霊性の表現

第4節 作品制作における神秘性・霊性の表現

おわりに

結章

本論文は全体をとおして、学位請求者の絵画制作上のテーマである「神秘性・霊性」に関するイメージを「熊野信仰」を対象として研究するものであり、絵画制作の観点からは「モチーフ研究」として位置づけている。また歴史的には長期にわたるイメージの変化を対象とするとともに、「神秘性・霊性」を感じさせる「要素・条件」の解明という視点を明確にすることにより、モチーフ研究の方法論としている。

序章では、絵画制作上の「神秘性・霊性を感じられる場の風景」という視点から論文の意図を明示して、本論文で使用する「原風景」「神秘性・霊性」「自然崇拜」「自然信仰」などの概念やツーリズム研究や「パワースポット」という言葉との関連を説明している。さらに直接の研究対象である紀州の熊野三山（本宮・新宮・那智）の概要と、宮地直一らの研究者による神道学、歴史学、民俗学などの研究動向から説明され、神仏習合による祭神の概要と自然景観の関係や、明治維新後の変化などが本論文の前提として概説されている。

第1章「『俊寛』作品群にみる熊野の神秘性・霊性」では、『平家物語』と『源平盛衰記』に登場する俊寛が康頼や成経とともに鬼界が島へ流罪された説話に、康頼と成経が島内の景観を熊野に見立てて参詣して二人だけが赦免されるという熊野信仰をモチーフにした記述があることを説明する。この説話から創作された謡曲『俊寛』、近松門左衛門『平家女護島』、小山内薫『俊寛』、倉田百三『俊寛』、菊池寛『俊寛』、芥川龍之介『俊寛』を対象にして、俊寛説話の変化を論じている。中世では神仏名を記述して熊野信仰を重視した説話であったものが、近世では人物中心の記述へと変化し、さらに近代文学においては作家ごとのスタンスで宗教を論争的なテーマとして批判や懐疑の対象として扱う作品が登場するものとなり、自然信仰の要素が多く言及される傾向を描いている。

第2章「1920-40年代の『旅』にみる熊野の神秘性・霊性記事」では、旅行ガイドブックを資料とするツーリズム研究の動向を紹介した上で、1924（大正13）年4月創刊の

雑誌『旅』について1943（昭和18）年8月までの233冊を対象として、熊野に関する神秘性・霊性記事240件を確認して、記事内容の特徴や傾向を検討している。ここでは神仏を通じてではなく、自然そのものから神秘性・霊性を感じる自然崇拝の傾向を近代日本の特徴としている。また、霊性・神秘性の要素として、自然景観のなかでも湿度など水に関する要素が多く見られることを明らかにした。

第2章補論「旅行ガイドブックにみる神秘性・霊性に関する試論」では、1945（昭和20）年以後に熊野を題材に出版された旅行雑誌、ガイドブック、パンフレット、旅行記などの刊行物から112件の本文を対象として、現代日本の熊野の神秘性・霊性のイメージを検討している。ここでも近代と共通して神仏名を詳述しない自然崇拝としての神秘性・霊性のイメージが確認されるとともに、「ダル」や「亡霊」などの神秘的存在の記述もみられる点が論じられている。

第3章「広島県比婆山伝説地・鳥取県熊野神社遺跡・京都三熊野における、熊野の神秘性・霊性イメージを形成する要素・条件」では、熊野に「見立て」をすることで成立したと考えられる例から、自然景観とりわけ神秘性・霊性を感じさせる要素・条件を検討している。第1節で比婆山山麓にある熊野神社（広島県庄原市西城町）について伝説に関する諸説と社格昇格運動や国定公園指定等の動向を紹介して、庄原市役所の協力による現地踏査の報告を行う。第2節では鳥取県鳥取市佐治町の熊野神社遺跡について近世の記録から現代の地元の保存運動までを紹介して現況を概説する。第3節では京都熊野三社と呼ばれる新熊野神社、京都熊野神社、熊野若王寺神社について、京都府行政文書などの歴史史料と各宮司のヒアリングをもとに概説する。これらを通じて、滝などの「見立て」や紀州からの樹木・土砂の搬入などの自然崇拝の性格を指摘する。

第4章「神秘性・霊性の表現—作品制作を通して—」では、作品制作をめぐって論述している。第1節では第3章を受けて、比婆山伝説地・鳥取熊野神社遺跡・京都三熊野における神秘性・霊性を踏査時の記録をもとに要素・条件を整理する。第2節では熊野曼荼羅と呼ばれる境内をモチーフとする説明的な図像と自作との違いを述べて、第3節では「那智瀧図」（根津美術館所蔵）の先行研究から湿度館を重要な要素とする自作との共通点を述べる。第4節では自作の7作品について神秘性・霊性の表現と本論文で論じた要素・条件との関係を論じている。

学位請求者はこれらの論述を踏まえて結論において、本論文で解明した主要な事項を列記する。①各時代を通じて自然物や自然現象が神秘性・霊性のイメージに関わり、自然崇拝の宗教観が共有されていること。②中世や近世では神仏信仰を中心にした宗教観から、神仏の姿をイメージすることが信仰表現の終着点になること。③近代以後には神仏よりも自然そのもの崇拝が中心になること。④現代では近代に見られなかった新しい霊的存在のイメージが言説として登場すること。⑤各時代に共通して神秘性・霊性のイメージを形成するさいに、水に関わる要素が重視されること。こうした研究上の論点から、熊野信仰にみられる「日本人の神秘性・霊性のイメージ」を描いたうえで、「原風景」の自然をモチーフに神秘性・霊

性を感じさせる絵画を制作する立場から湿度感などの共通性を主張している。

3. 本論文の評価について

審査にあたっては、予備論文で指摘された事項への対応を含む本論文での変更を確認し、本人への試問を含めて本論文の意義を確認した。

まず、予備論文審査における指摘事項への対応については、本論文における修正を次のとおり評価する。

- ① 絵画制作上のテーマについてのモチーフ研究として位置付け、作品制作にかかわってものをみる「まなざし」という点や、自作の制作に関する記述の充実という点では、新規に第4章を書き改めてさらに第4節で自作の解説を充実した点を評価できる。とくに、熊野に関するイメージをモチーフにした2011年の新作については、「モチーフ研究」をうたう本論文の意義を自作で検証したという側面でも評価することができる。
- ② 使用された「原風景」や「普遍性」、「自然崇拜」という用語については、本論文において用語の定義や慎重な用語使用の見直しを行った点が評価できる。
- ③ 修験道研究や明治維新期の変化に関する研究についてのフォローという点では、序章第2節で先行研究のフォローを加えている。この課題は研究整理だけでも大きな作業であるが、複数の委員から博士論文後の課題として引きつづき多角的に模索してほしいとの意見があった。
- ④ 熊野曼荼羅や「那智瀧図」（根津美術館所蔵）などの重要作品のフォローという点では、瀧精一以来の解釈史や修理報告書等の先行研究に依拠して、湿度感などの表現があることを確認して具象的で説明的な熊野曼荼羅と異なる絵画表現の可能性を確認できたところが、モチーフ研究という本論文の意図との関係で評価できる。
- ⑤ 広島と鳥取のフィールドワークの継続による記述の充実という点では、地元自治体や有志の協力を得て現地調査ができた点は重要である。京都三熊野を含めて「見立て」という行為を現実に確認でき、こうした実地調査においても本論文のテーマとなる「要素・条件」を検証できた点が評価できる。
- ⑥ 予定していた研究成果の発表（日本教育史学会例会）については、2011（平成23）年9月24日に実施している。同学会での教育史研究者の意見に対応してツーリズムの定義の明確化などのコメントがあった部分が論文の修正に反映されている。

つづいて、本論文の評価及び課題としては、次の点を評価した。

- ① まず、論文自体が学術的な先行研究を踏まえた上で、新しい資料分析や独自の知見が提示していることである。特に、第2章雑誌『旅』の熊野記事の分析は独自の研究として新知見を提示している。第2章補論も資料が限定された実験的試みによる現代的研究

として評価できる。これらの論考では広汎な学問分野の先行研究を検証したうえで、独自の資料調査の努力がなされており、得られた知見により学問分野への貢献が期待される。

② また、従来の学術研究に対して、横断的縦断的に再構成しつつ独自の新しい知見を提示しているものとして、第1章の平家物語から近代文学に至る時代を縦断した長期の変化が確認できているし、第3章及び第4章第1節の広島、鳥取、京都の熊野信仰の研究も横断的な共通性の確認という意味で新知見を提示している。課題としては歴史学等の手法によるさらなる緻密化があるが、自然崇拜の通時代性や湿度感などの要素・条件の確認という本論文の結論は説得力を有する。

③ 「モチーフ研究」という本論文のあり方が、学術研究と作品制作と間を往還できる新しい美術研究のあり方として提起されている。本学博士後期課程の作品制作研究領域では、技法研究よりも作家作品研究が主流であるが、本論文ではあえてこれらと異なるスタンスで博士後期課程における研究のあり方が提示した。もちろん本論文第4章で見られるように那智瀧図を評価して制作ノートの自作分析へと至る点などは作家作品研究の流れに近いが、本論文が神秘性・霊性を感じさせる要素・条件として提起する結論は、それ以外の論考があることではじめて独自の説得力を持つことができる。もちろん、一般的には作家がモチーフを研究することはごく普通の行為であるが、先行研究の確認と一次史料や現地調査に基づく独自の見解の提起という地道な研究姿勢により「モチーフ研究」が行われたことによって、絵画制作以外の分野に影響を与える知見を提示できたことを評価したい。

4. 作品の評価について

作品の審査については、まず、博士予備論文審査において、論文審査に並行して本人より作品のポートフォリオが提出されて、口頭試問及び審査の資料とした。審査においては作品制作指導にあっている遠藤彰子主査から作品制作の状況について報告がなされるとともに、口頭試問で各委員から作品についての試問がなされた。このとき、博士予備論文のテーマである「神秘性・霊性」というキーワードが作品と共通する主題であることが確認されるとともに、作品は空き地など様々な場を描くが必ずしも実在する場所を特定するものではなく、また直接に熊野や熊野信仰を描くものではないことが本人より説明された。審査においては、作品の特色や独自性と予備論文との関係性を評価するとともに、引き続き博士論文作成と並行して作品制作を続けることを求めた。

博士論文審査にあたっては、新作を含むポートフォリオが論文とともに提出され、作品そのものを展示した会場で公聴会を実施して、博士論文概要の発表につづいて展示作品の説明と質疑応答が行われた。これをうけて、出席した作品制作を専門とする教員からは、「すごみ」や「深さ」を期待する意見、「光と闇」や「湿度」の描写を評価する意見などが様々に語られた。

その後の審査委員会では、指導教員として制作分野を指導した主査の遠藤委員より次の

ように説明があった。「小澤啓は、美しいマチエールと卓越した描写力によって、植物の持つ生命力を幻想的に表現している。冬から春へ誘うような新鮮な感覚は、画面に人物が描かれていないにもかかわらず、人のぬくもりが感じられるかのような不思議な感覚を呼び起こす。彼は博士後期課程において熊野における神秘性・霊性のイメージの変遷を分析し、日本人の宗教観がどのように変化したかを研究して論文として発表してきた。このことが、作家としてのアイデンティティを構築する上で大きな足がかりとなり、作品にさらなる深みを与えていった。博士後期課程の制作では、生と死の間にある異次元の断層に踏み込んでしまったかのような、幻想と静寂感に包まれた森を描き、普遍的要素の中にオリジナリティが加味された神秘的な作品を創り上げた。平凡な風景として見過ごされてきたに違いないありふれた森の姿が、この描写力によって形を変え、現実のすぐ隣にある幻想世界の怖ろしさと温もりを感じさせるかのような佇まいに生まれ変わった。日本的な感性で、目に見えるものを通して、目に見えないものを表現するということの、一つのあり方を示唆している。」

これらを踏まえて口頭試問と審査を実施した。本人への口頭試問では作品について「静けさ」、「光」、「異界」、「崇高」、「人工性」などの概念が論文の記述内容と関連して質問された。また作品の構図や光の描写、制作者や鑑賞者の視線、何を見て何を描いたのかなど、作品そのものについて質問や意見が出された。あらためて本人から博士論文と作品との関係などが説明された。

審査の結論として、「神秘性・霊性」をテーマとする作品としての独自性と、博士論文との関係との関係性を持ったモチーフによる絵画制作の姿勢が評価され、作品制作研究領域の博士の号を与えるにふさわしいとの結論に至った。

5. 今後の課題あるいは期待について

本論文の後も、絵画制作とともに、学術分野の研究もまた続けてほしいと期待する。

本論文で得られた知見による具体的な作品制作をめぐることは、本論文の掲載図版や公聴会展示作品に基づいて、課題と期待が審査のなかで各委員から伝えられた。「静けさ」や「光」などへの注目、「異界」が空き地などに地続きにある意味、第3章でもテーマとなった人為による自然の創出をめぐる評価、作品表現における構図の意義などである。また、学会発表や論文発表のほか、学術研究と絵画制作を結合した成果発表のあり方、とくにイメージ研究やツーリズム研究などの文脈で、成果発表などが期待として表明された。



林の中の光

油彩 | キャンバス | 160.0×400.0 cm | 2011 年



夜の水たまり

油彩 | パネル | 29.6 × 42.0 cm | 2012 年



朝の水辺

油彩 | パネル | 44.6 × 66.7 cm | 2012 年



夜の水路

油彩 | パネル | 72.7 × 60.6 cm | 2012 年



熊野の印象

油彩 | キャンバス | 186.0 × 240.0 cm | 2011 年



豎穴

油彩 | キャンバス | 162.0 × 125.0 cm | 2012 年



地

油彩 | キャンバス | 162.0 × 194.0 cm | 2012 年